

亭主は跳ね起きた。俺の姿が異様なので吃驚したらしい。

『そを騒がんでも好いから、いつとき休ましてくれ、最う夜も明けるだらう』

俺は板仕切の圍爐裏の端へ上り込んだ。

亭主は四十位の男だったが、ネマキのまゝで芝や枯枝を持つて来て、ピシ／＼折くべながら、火を燃やしてくれた。

『俺は汽車から今朝飛び降りたんだが、腹が減つてゐる、めしを食はしてくれ』

段々明るくなつてきた。

亭主は布團を下げたり、そは／＼してゐたが表へ飛び出した。

俺は『めしを早く焚け、お菜は何でも構はないから』とドナリ散らした。

『家には炊事道具がありませんので、前の家から焚いて持つて来ます』とか言つて女房も亭主も出て行つたのだ。

亭主丈歸つて来て雨戸を繰つたり、板戸を外したり、態とガタ／＼さして、俺を追ひ出そうと試みたらしかつた。